

# 「信頼」という伝統を継ぎ

## 「本物」のすばらしさを伝えたい

株式会社山田呉服店 代表取締役社長 山田 秀夫さん

創業は明治41年。初代である山田与一さんが、当時岐阜一番の繁華街であった柳ヶ瀬に程近い岐阜市若宮町に呉服店を開いた。現在は四代目、曾孫にあたる秀夫さんが跡を継ぐ。

秀夫さんは、大学卒業後、銀行員として日本全国はもろろん、世界各地を飛び回っていた。しかし36歳の時、三代目である父、雅己さんから「そろそろどうだ」と、一言。その声に、迷うことなく銀行員生活にピリオドを打った。

いつかは仕事を辞めて岐阜に戻ってくる、店を継ぐということ、物心ついた頃からごく自然に受け止めていた。それは、家業が地元で多くの方々にも信頼され、親しまれてきたという伝統を受け入れて育ってきたからだ。

「使命感、ですかね。岐阜に根付いた呉服店を『信頼』して大事にしてください。お客様のために、自分も役に立ちたいという気持ちは何より強かったです」

### 「着物」は着てこそ、その良さと価値がより分かるもの

昭和20年代は、柳ヶ瀬全盛の始まりで、映画館、丸物百貨店、商店街、キャバレー街などで賑わい、歩くのが困難なくらいだった。当時、市電が最大の交通機関で本巣方面、高富方面、関、美濃市方面からも多くの人が柳ヶ瀬に集まった。そして高度成長期、着物は飛ぶように売れた。しかし秀夫さんが家業を継いだ時は既に着物離れが進み、あれだけ賑わっていた柳ヶ瀬もすっかり寂しくなっていた。しかし秀夫さんは

「どの時代も、その時その時の苦勞がありました」

戦争中は岐阜空襲にて店が全焼してしまった。古家を買った柳ヶ瀬に店を出したものの、戦後2年間位は統制経済で

ていないのかとよく聞かれる。しかし秀夫さんのこだわりは「対面」。そこにも「信頼」という何にかえがたい想いがある。

「私たちが信頼していただいた上で購入していただきたいのです。私たちもお客様を知り、もちろん、購入後のフォローも長くしっかりしたいからです」

秀夫さんには、海外赴任中に強く感じたことがある。

「外国の人は自国の文化を熟知しており、大切にしている。しかし日本人は日本文化についてあまり知らないし関心も少ない。茶道や華道など外国に誇るものはたくさんあり、着物もその一つだと言えます。誇るべき日本文化の重みを感じ、少しでもその「翼を担って」いけたらなと思っています」

秀夫さんは、「対面」というおもてなしで、一枚の着物も「日本を代表する文化」として大切に伝えていきたいと語る。

### 「着物」は家族の絆を繋ぐ

人生で一度しかない成人式。成人式で初めて着物・振袖を着るといふ女性は数多い。

山田呉服店にも、子や孫の晴れの日の衣装を探しに、多くの家族が訪れる。

最近では、ママ振りと呼ばれる、かつて母親が成人式で着用した振袖(ママの振袖)を着る娘も増えてきた。

「昔の着物は品質の良いものが多いんです。本来、商売人だったから新しい振袖を買っていただきたいのはもちろんですが、私は本当に良いものだと、そちらをお勧めしています。そんな場合は娘さんとその着物に合った帯や小物を見立てます。すると着物に新たな印象が加わり、娘さんの振袖として繋がっていくのです」

振袖は「特別なもの」。どの振袖にも、それぞれの家族の「想い」という背景がある。流行りの服とは用途が違い、着物は価値ある財産として母親や祖母と一緒に選ぶ。その選ぶ時間も含めた思い出も後々まで共有出来る。中には父親、祖父までも一緒に振袖を選ぶ家族もある。年代を超えて繋がりを感ずることが出来る。それを大切に伝えられるのが「振袖ならではの役目」でもある、と。

衣類の販売が出来ず、文房具と化粧品を売っていた。

昭和40年代、アパレル、観光、商店街など岐阜市が最も輝いた頃には、人手不足で従業員を集めるのに苦勞した。ノウハウを身に着けた社員の独立、大手の参入、と競争が激しい時代でもあった。

「その点、現在は、厳しい業界ではあるが『新規参入』はほとんどありません。悪い事ばかりではありません」

そのなかで、秀夫さんは着物に対する人々の意識が「儀式に着るもの」という存在から「日常を彩るもの」であると、少しずつ変わっていると感じている。

嬉しいことに、これまでは女性を中心だった着物も、近頃では男性が定年退職後に着物一式揃えて大人のおしゃれを楽しんだり、彼女や友達と一緒に浴衣を着て花火大会へ繰り出すなどといった楽しみ方もかなり増えているという。時代とともに多様化している着物の楽しみ方に寄り添い

応え続けていくことで着物の裾野は広がっていくと考え、「着物は着てこそ、その良さと価値がより分かるもの」と、10年前から「着物を楽しむ場」を提供している。

「着物を着たくても着る場所や機会がないという声を数多く聞きます。だったら着物を着て、歴史のある街を旅行したり、料亭でお食事をしたり、美術館へ行ったりと、着物とともに『本物』に触れる機会をつくりたいと思ったのです」

今はコロナ禍で思うように各地へ旅行にでかけることは出来ていないが、近場の本物を着用で「楽しむ」機会の提供は続いている。

### 「対面」は、最高のおもてなし

語学に堪能な秀夫さんは、海外向けのネット販売は考え

「振袖を着ると、普段は一緒に写真を撮ることがない祖母や両親など、家族みんなが笑顔で囲んで写真を撮られれます。そんな風景を見させていただけの時、本当に幸せです」

そんな秀夫さんのもとには、着物のたたみ方や保管の仕方などはもちろんのこと、各種儀礼、家紋の相談などといった着物に関することを超えた相談も持ち込まれる。

「おかげさまで、100年以上この土地で商売をさせてもらっていますので、岐阜ならではの慣習やしきたりなども時代の移り変わりとともに接してきました。そんなことも含めて、若い方々にもお伝えしていけるお店でありたいと思っています」

### 「本物」のすばらしさを伝えたい

秀夫さんが今いちばん心配していることは、伝統技術の継承者の減少だ。

伝統工芸は一度途絶えてしまうと、復活することが難しい。さらに、多くの場合、材料の確保や分業で製造を行っているところが多いため、後継者が不足すると分業ができなくなり、大きな影響を及ぼしてしまう。

着物もそのひとつ。

「着物はとても素晴らしい日本の文化だと思っています。だからこそ、きちんと『本物』で応えたい。今ならまだきちんと本物の着物をつくる人たちが残っています。受け継ぐ人が減っている技法で作られる着物をしっかりと残していきたい、着物を作る過程や生地や刺繍の良さを、熱意をもってお伝えする、日本全国の『本物』を守り伝えていきたいと思っています」

代々受け継いでできている「正直に誠実に喜んでもらえることをする」という教え。

信頼を失わないよう、これからも全力で努めたい。これこそ100年続いた老舗の信条である。

